

コロナ禍における愛媛大学法文学部「基礎外国語」の教育実践

—教員による授業の取り組みと学生アンケート調査の結果を中心に—

池 貞姫¹⁾, 秋谷 裕幸¹⁾, 諸田 龍美¹⁾, 柳 光子¹⁾, モヴェ・エリック²⁾,
野上 さなみ¹⁾, 野村 優子¹⁾, 菅谷 成子¹⁾

1) 愛媛大学法文学部

2) 愛媛大学教育・学生支援機構共通教育センター

Second Language Education (SLE) under the COVID-19 Pandemic at the Faculty of Law and Letters, Ehime University: How We Have Coped with the Challenge, Teaching Experiments and Experiences with an Overview of Student Surveys Conducted in SLE Classes

Jong Hi CHI¹⁾, Hiroyuki AKITANI¹⁾, Tatsumi MOROTA¹⁾, Mitsuko YANAGI¹⁾,
Eric MAUVAIS²⁾, Sanami NOGAMI¹⁾, Yuko NOMURA¹⁾, Nariko SUGAYA¹⁾

1) Faculty of Law and Letters, Ehime University

2) Center for General Education, Institute for Education and Student Support, Ehime University

はじめに

本稿は、新型コロナウイルス感染症に見舞われた、いわゆる「コロナ禍」において、2020年度愛媛大学法文学部の「基礎外国語(ドイツ語・フランス語・中国語・朝鮮語・フィリピン語)」の教育がどのように実践されたのか、概観するものである。まずは、2020年度末に行った学生アンケート調査の結果を示した上で、各担当教員による授業の取り組みを紹介し、改めて、コロナ禍における外国語教育の意義をふりかえってきたい。

1. 法文学部「基礎外国語」の概要

コロナ禍における「基礎外国語」の教育実践を述べる前に、ここでは、「基礎外国語」の設置に至る経緯や体制の実態について言及しておこう。

1.1 「基礎外国語」の位置づけ

現在、愛媛大学では英語以外の第2外国語科目は、全学共通教育(法文学部昼間主コースを除く)においては「初修外国語」、法文学部昼間主コースでは、専門入門科目と

して「基礎外国語」の名称で提供されている。

2016年度からの学部改組に伴い、法文学部では、「グローバル人材の育成」という教育目標を掲げ、学科統合がなされた。すなわち、人文社会学科の下に、昼間主コースにおいては、法学・政策学履修コース/グローバル・スタディーズ履修コース/人文学履修コースの3つを設置するという抜本的な改革を行った。その一環として、第2外国語を専門入門科目「基礎外国語」と位置づけ、1回生の必修科目とする教育体制を敷いた(注1)。

1.2 「基礎外国語」の実態

ここでは、改組以降の「基礎外国語」の授業時数・クラス数、担当教員ならびに各外国語の受講生数を示すことにする。

1.2.1 授業時数・クラス数、担当教員

「基礎外国語」科目は、1回生を対象としたクォーター制で、通年(前学期1Q・2Q、後学期3Q・4Q)週2回(火金5限)の授業となっている。ドイツ語・フランス語・朝鮮語は2クラスずつ、中国語は3クラス、フィリピン語は1クラスの全10クラスの編成である。担当教員は、基本

的にネイティブと日本語母語話者のペアで、それぞれ文法と会話の役割分担をしているが、日本語母語話者による単独授業もある。

1.2.2 受講生数の変遷 (2016～2020年度)

法文学部改組以降の2016年度から2020年度までの、外国語ごとの受講生数は、以下の表1の通りである。

表1. 各外国語ごとの受講生数 (括弧内は再履修・追加履修者数)

基礎外国語	2016	2017	2018	2019	2020
ドイツ語 (2クラス)	75	57(5)	39(8)	61(4)	61(4)
フランス語 (2クラス)	51	70	48(1)	60(3)	48(3)
中国語 (3クラス)	105	139(16)	153(20)	131(11)	134(10)
朝鮮語 (2クラス)	62	61(8)	85(4)	76(7)	51(5)
フィリピン語 (※)	4/7	4/3	5(1)/5	6(2)/5	13(1)/8
合計 (10クラス)	297	331	330	334	307

※フィリピン語は、共通教育「初修外国語」と同時開講。
初修外国語としての他学部履修者数も右に併記。

2. コロナ禍における大学・学部開講方針と「基礎外国語」授業実施形態の分布

コロナ感染症への対応が始まった2020年度に、法文学部は、愛媛大学の「授業の開講方針」(注2)を受け、前学期の第1Q・第2Q期間は遠隔授業のみとなり(注3)、当然ながら基礎外国語科目も遠隔授業の実施となった。後学期は、大学と学部の方針によって、3Qは対面授業が可能となったが、4Q途中でコロナ感染第4波が襲来したことにより、再び遠隔授業の実施のみとなった。以下に、基礎外国語の第1Qから4Qまでの授業形態とクラス数の内訳を表2に示すこととする(注4)。

表2からわかることは、「基礎外国語」は、前学期において遠隔同期型の授業の割合が最も多く、次いで、遠隔非

同期型も行われていたということである。後学期は、対面授業の実施が可能となったことから、3Q・4Q前半で、多くのクラスで対面授業が導入された。先述した通り、基礎外国語は週2回ペアの教員で行うのが基本であり、両方対面・両方遠隔同期型の授業もあったが、対面と遠隔、もしくは遠隔でも同期と非同期という組み合わせで、バランスを取る場合も多かった。第4波が襲来した2021年1月以降は、遠隔同期型の実施が最も多いという結果になった。

3. 学生アンケートの実施ならびに結果と分析

ここでは、年度末にMoodle上で行った基礎外国語アンケートの結果を見ていきたい。対象者は、5つの基礎外国語(10クラス)の受講学生であり、アンケートの実施期間は2021年1月26日から2月12日までである。アンケートは、匿名で行うこととし、学生へのアンケート依頼の際には、「アンケートは匿名の形式となっており、集計作業は誰が提出したものか把握することなくされ、成績にも全く影響することはありませんので、率直にお答えいただけたらと思います」と、前置きの説明をした。回答数は250であり、回収率は84.2%である。

以下、アンケートの設問内容とそれに対する回答数の分布図、さらには、自由記述の主な内容を示すことにする。なお、2020年度は従来のアンケートの設問に、コロナ禍における感想・意見を求める設問(5)をつけ加えて実施した。

3.1 アンケートの設問内容と回答数の分布

(1) 言語(ドイツ語, フランス語, 中国語, 朝鮮語, フィリピン語)選択の理由(複数回答可)

次の図1④「その他」の自由記述については、大別すると、「その国の歴史や文化(音楽, メディア, スポーツ等)への関心がある」「日本語と類似する点があり、学びやすそうだから」「これまで学んだ英語との共通点があるから」「就職に役立てるため」「話者人口の多さ」「希少価値のある言語であるから」という内容の回答が見られた。

表2. 2020年度基礎外国語の授業形態とそのクラス数(10クラス)

	①遠隔同期型	②遠隔非同期型	③遠隔同期/ 遠隔非同期併用型	④対面	⑤対面/ 遠隔同期併用型	⑥対面/ 遠隔非同期併用型
1Q	8	1	1	0	0	0
2Q	8	1	1	0	0	0
3Q	0	0	1	5	4	0
4Q(～12月)	0	0	1	5	4	0
4Q(1月～)	8	1	1	0	0	0

・①遠隔同期型—ZoomやTeamsなどのネット会議システムを使った、リアルタイムの授業形態。

・②遠隔非同期型—Moodleなどのシステムを利用し、教員があらかじめ作成した教材(動画を含む)に学生が随時アクセスして学ぶ形態と、修学支援システム等のメールにより教材や課題を与え、指導する授業形態がある。

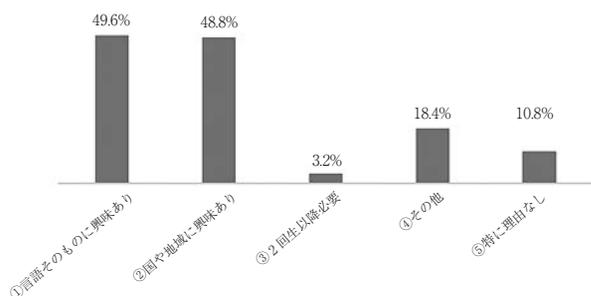


図 1 「言語選択理由 (複数回答可)」

(2) 今後、1 年生時に学んだ英語以外の外国語の勉強を続けたいですか。

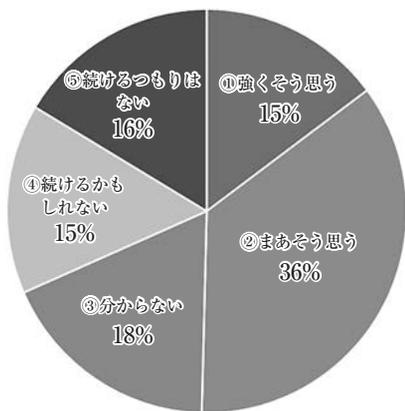


図 2 「学習継続意思」

受講した外国語の学習継続意思について、51% (「続けるかもしれない」も入れると、66%) と半数を超えた結果となった。

(3) 全体として、受講した英語以外の外国語の授業はあなたにとって有益でしたか。

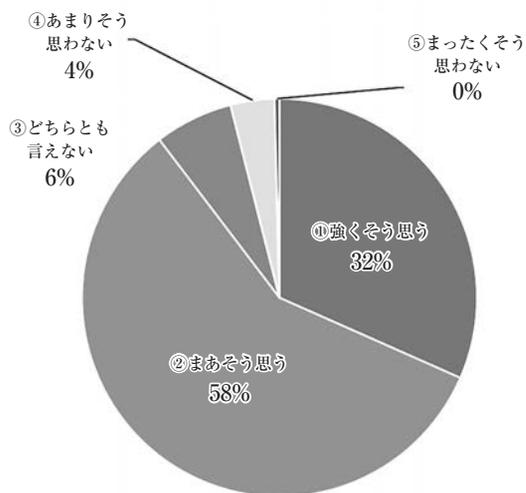


図 3 「授業の有益性」

受講した外国語の有益性については、肯定的な回答が 90% という高い結果であった。

(4) (3) で選んだ選択肢について、なぜその選択肢を選んだか、その理由を簡単に書いてください

肯定的な回答としては、「言語とともに文化にも触れられた」「英語圏以外の国への視野が広がった」といった、英語以外の外国語や異文化への理解が深まったというものや、「多少なりとも会話ができるようになった」「ネイティブに通じた」「映画を見て聞き取ることができた」「その言語の文字で書かれた看板や表示が読めた」「その言語で表されている SNS を見て、わかるようになった」「検定試験に合格した」「新しい体系の文字が読めた」などの言語の上達を実感できたという記述、また、「旅行や就職に役立てられそう」「英語以外の言語ができることの強みがあった」という将来への可能性や展望を積極的に述べている回答も見られた。その他にも、「言語というものについて改めて考えるきっかけになった」などの学問的関心の萌芽が垣間見られる回答もあった。

否定的な記述としては、「今後、その言語を使うかどうかかわからない」といった、実用性を疑問視するような回答もいくつか見られた。

(5) この授業についての感想や意見を自由に記してください。コロナ禍における授業として (比較的) 良かったところがあれば①として、逆にきわめて不都合だと感じたところがあれば②として、具体的に挙げてください。また、コロナ禍とは無関係と思われる内容については、③として記述をお願いします。

①コロナ禍における授業として (比較的) 良かったところ

遠隔授業全般について、「通学時間が短縮できた」という利点をあげる回答が多かった [13 件]。基礎外国語の授業では、遠隔同期型 (Zoom) の実施が最も多かったことから、その利便性を挙げる回答が多く見られた (「(Zoom) の授業で」先生の口元がはっきりとわかった」「パソコンで音量調節もでき、発音がはっきりと聞こえやすかった」「基本的にミュート設定だったので、他人に気兼ねせず発音練習ができた」「辞書などのツールがすぐに使えた」「Zoom の授業が多かったが、実際に対面に近い授業だと感じられた」「ブレイクアウトセッションの機能を用いての学生同士の会話練習も行えた」「発言が誰かがわかりやすかった」「共有画面が見やすかった」など [14 件])。

そのうち、遠隔非同期型 (Moodle 等) については、「Moodle に学習データが残っていて復習がしやすかった」「動画が繰り返し見られた」「自分のペースで勉強に取り組めた」など、反復の機能を高く評価する回答があった。

一方、3Q に行われた対面授業については、対面授業が一時期でもあったことを評価し、外国語以外の授業で非同期型授業が多い中、「友だちをつくるきっかけにもなり、またより深く学ぶことができた」「感染対策に配慮しながら、

わずかでも対面授業を開講してくれてよかった」など感染対策が徹底され、対面授業を通して同級生との交流がはかれたことを喜ぶ回答が多かった [12 件]。また、感染状況に応じて、授業の切り替えが迅速に行われていたことを評価する回答もあった。

②コロナ禍における授業としてきわめて不都合だと感じたところ

通信環境の不具合で、授業参加に困難や障害があったという回答が 21 件あった。また、「オンラインだと自分の発音が正しいのかわからない」「オンラインでの発音が対面で受けた時と印象がちがった」など外国語の発音練習の難しさを嘆く声もあった [6 件]。さらに、Zoom によるテスト実施について、聞き取りがネット環境に影響されることがある (1 件)、慣れない文字種の入力や文字変換に苦勞したという回答なども寄せられた [5 件]。

そして、「オンラインだとだらけてしまう」「質問がしにくい」「コミュニケーションがとりにくい」など、オンライン上でのコミュニケーションや学習の限界を感じたり (16 件)、「対面でみんなとコミュニケーションをとりながら授業を受けたかった」「少しでも対面授業があるとよかった」など対面授業があまり行われなかったことについて残念がる回答が 11 件あった。

教員による日程周知が徹底されない場合があったことや、Zoom の授業で教員と学生間でコミュニケーションに齟齬をきたすことがあったと回答したものもあった。

③コロナとは無関係と思われる内容

受講した授業について「わかりやすかった」「わかりにくかった」「楽しかった」「授業の雰囲気よかった」「先生が優しかった」「苦痛だった」などの感想やテストに関する意見等が主なものであった。

3.2 アンケート調査にみる全体の傾向と分析

今回のアンケート結果から、浮かび上がる傾向は以下の通りである。

アンケートの設問 (2) でも見たように、受講した外国語の学習継続意思が 51% (「続けるかもしれない」を含めると、66%)、(3) の受講した外国語の有益性については、90% という高い割合の結果が示されたことから、おおむね、学生が受講した「基礎外国語」、すなわち、英語以外の外国語の履修について肯定的に捉えているということがわかった。それは、主に、異文化理解、語学習得の達成感、将来への展望が育まれているためだということが、アンケートの自由記述からも窺えた。

また、学生は、コロナ禍の厳しい状況の中で、現実に適応し、教員たちによる遠隔授業のさまざまな工夫を、一定程度評価する傾向が見られる一方で、その限界も容赦なく

指摘している。さらに、(5) の①で見た通り、対面授業が一時期でもあったことを評価し、(5) の②にあるように、それを渴望する自由記述が少なからず見られたことから、学生の対面授業へのニーズが高いことが窺えた。いうまでもなく、「授業」の場は、知識の伝授にとどまらない。授業は、学生同士の交流の出発点となり、人間関係を築いていく場ともなる。コロナ禍で授業のほとんどが非同期型授業だった 1 回生にとって、学生同士の交流の貴重な機会を「基礎外国語」が提供したともいえよう。

一方、以下の 4 の「教員の取り組み」でも述べられるように、「基礎外国語」の非同期型においても、課題に対するフィードバックが頻繁になされ、教員と学生間で丁寧なやりとりがなされていることも、授業評価の高さに繋がっているといえよう。

通信環境の不具合については、その自由記述が 21 件と少なくないだけに、そのフォローが不可欠である。

3.3 2020 年度以前のアンケート調査結果との比較

ここでは、アンケート設問の、受講した外国語の学習継続意思を問う (2) と有益性を問う (3) について、前年度 2019 年度の結果 (注 5) と比較してみよう。

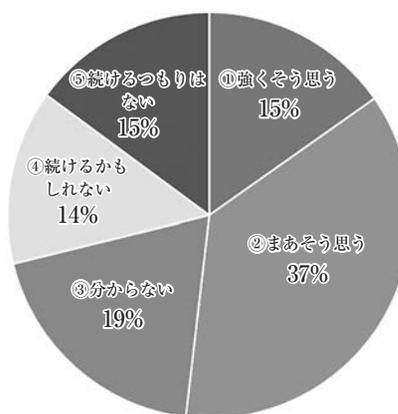


図4 「学習継続意思」(2019)

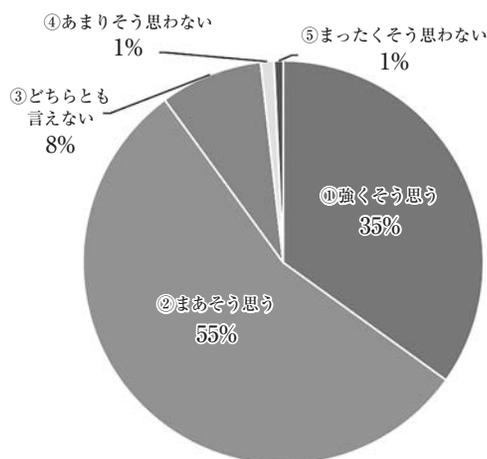


図5 「授業の有益性」(2019)

受講した外国語の学習継続意思と有益性については、ほぼ同程度という結果となっており、コロナ禍でも、それまでと満足度は変わらないということが明らかになった。

4. 各外国語における教員の取り組み

ここでは、各言語の教員による授業の取り組みについて、それぞれの授業担当者（注6）が上記3のアンケート調査の結果を踏まえながら記述したコメントによって紹介することとする。

4.1 ドイツ語

4.1.1

【取り組み内容】

筆者の担当した「基礎ドイツ語」クラスは、受講生数が前期30名・後期31名で、日本人とドイツ人教員が週1回ずつ授業を行うペア・クラスであった。ドイツ人教員がZoomによる会話中心の授業を行ったので、筆者は文法事項と言語構造の論理的理解を中心に据えた非同期型遠隔授業（修学支援システムを使用）を実施した。1回の授業ルーティンは次のとおりである：1. 授業内容をPDFファイルで受講生に一斉配信する。2. 定期的に理解度を確認する課題をWORDファイルで提出させる。3. 全員の提出課題に添削事項と質問への回答等を入力後、PDF化して返却する。興味深い質問や優れた解答は全員で情報共有するとともに、ドイツ語圏の文化解説を授業に盛り込むにあたっては、写真・図版・外部URLを活用して世界遺産や衣食住に関する情報に学生自身でアクセスさせた。期末試験問題も文化情報の講読と組み合わせることで好奇心を刺激し、試験未提出（未受験）の防止を狙った。

【成果】

年度初めには課題未提出者の増加を危惧したが、予想よりも積極的な課題提出が続いた。その理由として、課題添削が個別指導の形となったため、他の受講生を意識せず教員に直接疑問を投げかけられたことが挙げられるであろう。さらに、過去の対面授業では聞いたことがない細かい質問もいろいろと記述されていた。

書式によるやり取りが要となる授業だったので、ドイツ語の特殊文字4つのパソコン入力を克服できるよう、年度初めの授業で対応方法を丁寧に指導した。その結果、約2/3の受講生は特殊文字、または代替綴りのパソコン入力をマスターしていた。

また、過去の授業よりも文化解説を多めに盛り込んだことで、授業や課題に楽しみながら取り組めたという授業評価アンケート結果もあり、これは学生のモチベーション維持に役立ったと考えられる。「非同期型遠隔授業はコミュニケーションがとりづらい」という意見があった中、本授業の形態については「好きなタイミングで見直しができる」

「自分のペースで理解を深められる」「いつでもどこでも受講ができる」という肯定的な意見もあった。

【課題】

試験の実施方法が限定されてしまったことが大きな課題である。非同期型授業のため、参考資料を一切使わずに解答する形式の試験は実施できなかった。辞書や教科書を使いながら問題に取り組みせ、期限内に提出させることで、学期中の学習事項の理解度や定着度は確認することができた。

（野上さなみ）

4.1.2

【取り組み内容】

ドイツ語を担当した教員の遠隔授業形態は、Zoomを利用した遠隔同期型とMoodleや修学支援システムを利用した遠隔非同期型に別れ、筆者は前者を選択した。令和3年度の現在ではZoomの使用にも慣れ、対面と同じ感覚で授業を行えるが、令和2年度当初は遠隔授業に大きな不安を抱えていた。そもそもコミュニケーションを重視する語学において、遠隔授業が成り立つのだろうか。その中でZoomを選んだのは、少しでも学生の反応を見たかったからである。

筆者が担当した「基礎ドイツ語」文法クラスの授業内で配慮したのは、まず、教科書の内容に即したPowerPointを作成し、学生が対面授業と同じ感覚で授業を追いかけやすいようにした。そして、スライドの中に適宜、イラストや図解を用いたより詳しい解説も取り入れ、文法事項が定着するよう心がけた。また、一方向の通信になりがちな文法説明が単調にならないよう、例えば、発音や数字、曜日など基礎的内容をクイズ形式で学生に答えさせるコーナーを設け、学生の積極的な授業参加を促した。また、Zoomの授業だけでは学生の習得状況が確認できないため、毎回、Moodleに復習課題を上げて提出させ、次週、間違いの多い箇所を中心に解説した。加えて、Moodleに授業に対する質問や感想を記すコーナーを設け、それに毎週答えることで、学生の習得に取りこぼしのないよう努めた。

【成果】

学生にはできる限りカメラをオンにするよう呼びかけたので、むしろマスク付の対面授業よりも口の動きが確認できるという利点はあった。そして、会話においては一対一の場面がZoomでも成立可能なため、特に支障を来すことはなかった。授業で使用したスライドをPDFにしてMoodleにアップし、いつでも閲覧可能にしたため、復習しやすいという意見も受け取った。また、毎回の復習課題提出により、多くの学生に着実な学力の向上が見られた。後学期で対面授業が可能となった際には、Zoomでは取り組みにくかったペアワークを可能な限り取り入れたため、新たな言語で他者と話す喜びを味わう学生の姿が見られ

た。

【課題】

Zoomには互いの顔を確認できるという利点がある反面、通信状況によって互いの声が聞き取りにくいという欠点もある。学生のアンケートを見ると、会話教育を中心としたクラスで、Zoomのやり取りに齟齬をきたしたこともあったようである。この意見には教員側もよく耳を傾けなければならない。不慣れな言語を口にする際に学生はストレスを感じやすく、すぐに返答できないからといって理解していないわけではない。通信状況によるタイムラグがあることを考慮して、学生にテンポを合わせた授業設計が必要であろう。

また、遠隔授業で何より頭を悩ませたのは期末試験であった。「持ち込み可」とせざるを得なかったので、問題数を増やすなどその難易度を高く設定したのだが、その加減を誤り反省する結果となった。学生の意見では、やはり対面授業を強く望んでいるので、状況が許す限り（とくに試験は）対面授業を実施し、やむを得ない場合のみZoomかMoodleを使用する方針に変えた方が良さそうである。アンケートを見る限り、遠隔同期型と遠隔非同期型の満足度に差は見られない。双方の利点を合わせて授業設計すれば、遠隔授業でも十分な効果は得られるのかもしれない。

（野村優子）

4.2 フランス語

4.2.1

【取り組み内容】

筆者が担当した「基礎フランス語」文法クラスについては、遠隔授業以外の選択肢がなかった前学期の工夫としては、休講期間内に2回の「プレ授業」を非同期型で実施し、Zoomによる同期型授業への導入ならびに「お試し参加」の機会を設けたことがまず挙げられる。同時にすべての情報をMoodleコース上に集約し、Zoomへのリンクも毎回そこに配置した。学生にはカメラをオフにした状態での受講を認める代わりに、毎回Moodle上で質問や感想を投稿することを義務づけ、次回までに一人ずつコメントを返す作業を反復したところ、「おかげでモチベーションを保てる」との反響があった。授業が単調にならないよう途中で歌曲や動画を視聴させる、授業時間外に取り組む練習問題や、文化的あるいは時事的な情報を提供するコラム等を、毎回のコース上にアップする、などの配慮はコロナ禍に見舞われる前から実施していた。

後学期にはこれらをすべて継続したほか、期末試験の改良を試みた。対面での実施を予定しており、3Qではそれが実現したが、4Qでは再び全面的な遠隔授業となったからである。試験内容を詳しく予告したうえで、配点は少ないが応用問題として、歌詞ゆえの「破格」を訂正させるな

ど、各自の総合的な実力が正確に反映されるよう工夫した。本アンケートでの「テストがものすごく難しかった」との自由記述は、応用問題に苦戦した学生によるものと思われるが、同じ学生が授業全般や試験後の「救済措置」（厳密には救済ではなく、後から練習問題として再受験した場合、「E-ラーニングへの取り組み」として評価する）に肯定的なコメントを残していることから、大きな不満の表明とみなす必要はないものと思われる。

【成果】

アンケートの数字としては、学習継続の意志ありとする者が約5割、授業が多少とも有益であったとする回答が約9割となっており、全体の平均とほぼ同じであるが、有益とした理由について、実用的な有益性や、外国語の学習そのものに価値を見出す意見に加え、「言語を通して文化を学べた」、「自分が専攻したい分野では使わないと思うが、知見が広がった」などの声もあり、異例の状況下に置かれつつも第2の外国語を学ぶ意義を感じ取った学生が多かったことに安堵した次第である。

【課題】

発音を確認するための音声教材はコロナ禍以前からMoodleコース上に設置したものがあり、アクセント記号などの入力方法も機種やデバイスごとにスクリーンショット等を多用して解説を加えていたため、取り立てて困ったという声は聞かれなかったが、試験時には念のためすべての特殊文字をコピー＆ペーストで入力できるようにしておいた。それでも手書きするより時間はかかったであろうし、不自然な形となったことは否めない。不慣れな学生たちがどのくらい時間を要するかを見極めることが難しく、試験の構成や実施法にはさらなる試行錯誤が必要と感じた。通常は手書きで記入し提出させたのち、こちらも赤ペンで添削して返す課題についても、用紙を撮影した画像を投稿させる形で対応したが、個別に丁寧な指導を受けているという実感はやや薄れたのではないと思われる。

（柳 光子）

4.2.2

【取り組み内容】

筆者の担当した「基礎フランス語」会話クラスにおいては、初回授業から数回が一番重要な授業となる。なぜなら学生が授業に興味を持てるか持てないか、理解が進むか進まないかなどの感触の確認、言語の概要や読み書き、発音などの基礎はこの最初の数週間がベースとなり、後の学習モチベーションに繋がるためである。

そのような意味がある中、前学期は休講から始まり遠隔授業の形をとらざるを得ない状況になった。この最初の数週間の重要性和、学生のコロナ禍における精神的な重さ・やる気を考慮した上で、従来の対面教育とできる限り変わらない授業を提供する必要がある、遠隔同期型で行う

こととした。そのため研究室を遠隔授業に対応可能な状態にすべくカメラ2台、ホワイトボード、マイクを設置し、Zoomを利用した遠隔同期型によって従来どおりの進行、つまり前半45分の講義、後半45分の練習時間を確保した。

遠隔授業では、対面と同内容であるのにも拘わらずテクニカルな問題等から通常45分の講義が60分近くかかることがよく起こった。そのため本来対面授業でとれるはずの45分の練習時間が少なくなり、これについて考慮する必要が生まれた。そこでMoodleを活用した聞き取りや発音練習のコンテンツを準備し、学生自身で学べる環境を提供した。

このように進めた結果、これまでの対面授業とほとんど変わらない内容を、まじめに学習している大半の学生に提供することができたと思われる。ただ、練習時間では個人で練習をしたに留まり、生きた会話経験が少なく、テストではそれを考慮することとした。

【成果】

後学期は対面授業となり、学生、教員との関わり合いとしては従来通りとなり、授業の進みが前学期に比べ飛躍的に伸びた。対面期間中に学生に聞いてみたところほとんどの学生が学習効率が上がったと感じていた。要するに、同じ場に先生と学生がいるという学習環境では、直接交流できることによって理解しやすく、また理解が速まり、学びが容易になるということであり、特に後半のグループ練習で顕著であった。なにより学生が生き生きとし、学習する喜びを感じている様子がしばしばみとれた。

【課題】

ただ対面授業とはいえ、マスクやソーシャルディスタンスによって声や発音が聞き取りにくいという音声の面(Verbal)、表情が分かりづらいというコミュニケーションの面(Non-Verbal)はマイナスとなる場所であった。

テクノロジーにより遠隔で授業を行うことは可能ではあるが、テクニカルな問題をどうしても挟んでしまい、コミュニケーションが不足するという現実に直面した。さらに実は科目や分野によってのみならず、人によっても、その人の持つ能力や性格に合わない、または能力以上を求められる場合もあるため、学習とは直接には関わりのない困難が新たに生じるという問題を、遠隔同期型を通して筆者は痛感した。このようなことから遠隔授業は必ずしも適切ではないという結果が残ったと思われる。

(モヴェ・エリック)

4.3 中国語

4.3.1

筆者は「基礎中国語」クラスの担当ではなく、共通教育「初級中国語」クラスの担当だが、大学における中国語入門授業の統括をしている立場から、「基礎中国語」のアンケート結果についてコメントしたいと思う。

【取り組み内容】

授業は主として遠隔方式で実施された。遠隔授業による初修外国語の教授法については、教員側にとっても大きな試練と言える。学生の回答にあるように、対面とあまり差が感じられない側面も確かにある。また私自身は、日本語に存在しない母音・子音を発音する際の口の形を見せやすい、黒板に字を書くよりもパソコン上で入力の方がよほど速いなど、対面授業にはない長所を感じていた。学生側も、周囲を気にせずに発音練習をすることができる、録画による復習が可能などのメリットを感じていたようである。

【成果】

全体として94%の受講生が授業について有益だった(強くそう思う・まあそう思う)と感じており、困難な状況下においても教える側の責任は果たせていると思う。

【課題】

その一方で遠隔授業が解決しなければならない問題として、アンケートから以下三点を読み取ることができた。まず、通信環境のトラブルを多くの受講生が挙げていた。この問題は今後も一定期間継続していくと思われる。次に対面での会話練習がむずかしいという問題がある。これは教員側が授業方法を改善し続けていく必要があろう。そして私の考えでは、遠隔方式の最大の問題はテストにあると思う。不正行為の防止を前提に外国語のテストを遠隔で行う方法論については、教員間でもさまざまな意見がある。受講生からのとまどいの声も多かった。クラス間での不公平が生じないように、今後も検討を継続したい。

(秋谷裕幸)

4.3.2

【取り組み内容】

筆者は遠隔授業をZoomによって実施した。テキストを画面共有で映しながら、発音練習とテキスト書写を行わせ、その後、学生を指名して、発音と解釈を発表させたうえで、筆者が補正と解説を行った。発音練習の機会及び「ブレイクアウトルーム」機能の活用による学生相互のコミュニケーション機会を増やすことを心がけた。さらに映像資料を用いながら、中国の文化や人々の生活についても具体的な理解が広がるよう工夫したつもりである。

【成果】

コロナの感染拡大により、ほとんどの期間が遠隔授業となってしまう、学生の受け止め方について心配もあったが、アンケートを見る限り、肯定的な評価が大半を占めているようで安心した。これは学生側も状況に鑑みて「できないこと」を理解していることが、一つの要因であると思う。画面越しにはあるが「ブレイクアウトルーム」などを用いて学生相互の発音練習や交流の時間を確保できたことは、アンケートでも特に好評を得たようである。感染の

心配がない点や、映像資料を容易に組み込める点と併せて、遠隔授業のメリットであった。

【課題】

一方で、友達と直接的な交流ができないことを嘆く声も多く、第2Qの後半で少し対面授業を取り入れたことは、せめてもの慰めになったようだ。オンライン特有の課題として、「氏名」のみが映った画面の先に「実際に学生がいて、積極的に授業参加しているのか」、確信を持ってないことがしばしば、という問題がある。背景を隠すなどしたうえで「学生は画面に顔を映しながら受講すること」を原則にできないものであろうか。他の反省点としては、試験内容についての事前案内が不十分であったという指摘がある点である。特に前学期は試験慣れしていないので、事前の説明はより丁寧に行く必要があったかもしれない。それと連動しているか不明だが、試験の得点が極端に低い学生が2名ほどいた。遠隔授業では基本的に学生個々の「顔が見えない」ので、積極的に授業参加できているか、確認しにくい点はやはり大きな短所であると思う。

(諸田龍美)

4.4 朝鮮語

【取り組み内容】

「基礎朝鮮語」は、日本語母語話者(筆者)による単独授業のクラスと、韓国語ネイティブと日本語母語話者の教員によるペア・クラスがある(注7)。

まず、筆者の取り組みについて述べると、1Qは、Moodleコースによる解説と課題を掲載する形態から、Zoomによる授業の実施に移行した。初期は、初めての遠隔授業で不安におののくばかりであったが、学部や他部署の教員によるサポートの下、ZoomやMoodleの勉強会に参加し、曲がりなりにも遠隔授業を始動させることができた。Zoomによる、リスニングやスピーキングを重視した前期の授業で筆者が意識的に心がけたのは、従来の対面授業に近い形で、反復練習を繰り返し、なるべく多くの学生に質問し答えてもらうこと、「ブレイクアウトルーム」の機能等を使って学生同士の対話を多く促すこと、Moodleのフィードバック機能を使って、毎回質問と感想を受け付けることなど、授業が決して一方的にならないことであった。このことは、遠隔授業でも緊張感を持たせつつ、学生同士の交流も多少なりともはかれたということで、学生たちにはおおむね好評だった。後学期の3Qは、対面授業の実施により、学生同士の直のコミュニケーションや交流が一時でも可能となり、学生の満足度も高かったようである。4Qの途中で再びZoomの授業となったが、授業の最終回に、韓国にいる留学生をゲストで招き、韓国語のやりとりを体験できたことは学生の自信ともなったようである。

もう一方のクラスは、前学期にZoomの授業を実施し、後学期は、対面とZoomの併用であった。Zoomの授業実

施において、筆者のクラス同様、学生に多く発言をさせたり、こまめな確認テストを行って文法事項の定着をさせる等の工夫がなされたり、趣向を凝らしたパワーポイントの画面を共有し、学生の理解度をはかった。さらに、両方の朝鮮語クラスでは、ことばの他に、韓国の地域、文化、歴史、政治経済や書籍案内等を随時取り上げ、学生の知的関心が広がるように務めた。

【成果】

両朝鮮語クラスにおける受講者アンケートでは、約9割が「授業が有益であった」との結果であった。アンケートの自由記述としては、「ハングルが読めるようになった」「朝鮮語の歌や映画等を少しでも聞き取れるようになった」「身近なSNSの韓国語がわかった」等、達成感が窺えるものが少なからずあった。コロナ禍においても、外国語学習の実践から、学生たちの中で「積み重ねが実を結ぶ」という勉強の基本姿勢が体得できたことは、幸いであった。

【課題】

朝鮮語の遠隔授業における難関の一つとして、キーボードでハングルを打てるようにする教育が挙げられるだろう。ハングルは、独特のキーボード配置であり、例年だとメディアセンターで対面指導を通じて指導を行うのだが、2020年度はそれがかなわず、課題等は紙にハングルを書かせて写真に撮り提出させるという、原始的で面倒な方法を使った。だが、オンライン授業でこそ、ハングルのキーボード入力の習得が重要だということを改めて感じている。Zoomのチャット機能でハングルを使用しやりとりしたり、スムーズな課題提出等が行えたりと、高い利便性が見込めるからである。今後、遠隔授業しかできないときに備えて、オンライン授業でも体系的なハングル入力の教育を組み込むことを課題とした。

(池 貞姫)

4.5 フィリピン語

筆者が担当する「基礎フィリピン語」は、共通教育の初修外国語「初級フィリピン語」との合併開講のため、特に前学期は、教育学部、理学部、社会共創学部、法文学部夜間主コース所属生など、受講目的を異にする多様性に富んだクラス編成であった。

【取り組み内容】

前学期は、遠隔授業以外の選択肢がないなか、遠隔同期型の体系的構築の余裕がなかったこともあり、Moodleによる遠隔非同期を中心にして進めた。Moodleには教科書に添った補足説明資料をアップし、要所においては、個々の学生の進捗や希望に即してフィードバック機能やメッセージ機能を活用して補足したほか、発音指導を含めて、Teamsの音声通話を利用して、口頭での個別の補足指導を実施した。

具体的には、上述の説明資料の読込みを基礎とした、教

科書各課の本文や例文の入力、日本語訳、練習問題への対応をルーティンとし、別の教材を参考として作成した応用的な練習問題などもアップし、それらのいずれかの作業を課題として毎回の授業日に提出させた。また気分転換を兼ねて、幼児・小学校低学年向けの歌唱を含む動画を視聴しての発音練習や料理法などの動画による聴き取りをその時々に応じて挟むなどの工夫をした。

後学期は、3Qでは概ね対面授業が可能になったので、フィリピン人留学生を招いて、フィリピンの歴史と文化について話してもらう機会をもったが、学生にも良い励みと刺激となった。第4Qでは、再び遠隔授業となったため、前学期の授業実施の枠組みを基本にしたが学生にとって進捗がやや早いようであったので、少し余裕をもたせるようにした。

【成果】

受講者アンケートでは、回答者11名のうち9名が「授業が有益であった」としていた。「言語を通して文化や風習を学べた」、「フィリピンの知識を学べてとても楽しかった」、「進捗が早く苦労したが、新しいことを学べた達成感を得た」などの感想もあった。また「フィリピン語」を受講した2回生より、継続しての履修可能な科目のないことに気づいて非常に残念だったとのコメントも寄せられた。遠隔非同期授業の比重が高かったが、それなりのインパクトもあったことが実感できた。

【課題】

遠隔非同期授業のメリットには、学生が自身のスケジュールに合わせての受講、他の学生の存在を気にせずに発音練習できること、また自身の理解力に合わせて繰り返しの資料閲覧や、対面授業では提供する余裕のない動画教材の視聴などがある。一方、対面授業時の口頭説明には問題なく対応・理解できても「文字情報」を把握することには程度の差はあっても困難を抱える学生もあった。上述のように音声指導を併用して個別のニーズに併せた補足説明・個別指導を行ったが、説明資料に基づいた課題の対応力には差が生じる結果となった。これらの点については、遠隔同期型と遠隔非同期型とを適切に併用することによって対面授業に近い効果が得られる可能性があると思われるが、技術的なことも含めて今後の課題としたい。

(菅谷成子)

おわりに

本稿では、コロナ禍における法文学部「基礎外国語」の授業実践について、学生アンケート調査の結果や各担当教員の授業の取り組み事例の紹介を通して、概観した。以下にその要点を示しておきたい。

コロナ禍において、緊急避難的に導入された遠隔授業であったが、語学授業においては、担当教員による様々な工

夫によって、その利点も示され、それが予想以上に功を奏した面も少なくなかったが、その一方、本質的な限界も示された。語学教育における究極の目的である「コミュニケーション」は、いうまでもなく、人と人との直のやりとりをすることが基本である。学生も大学生活において、それを少なからず求めているということが今回の調査で浮き彫りになり、法文学部「基礎外国語」が、そのニーズの一端に応える機能を果たしていたことが明らかになった。

学生がアンケート調査で示した、遠隔授業・対面授業のメリット、デメリットについては、今後さまざまな角度からの綿密な検討が必要になるだろう。

われわれ担当教員は、コロナ禍に対応するなかで、さまざまな力を育む大学における外国語教育の役割を改めて認識することになった。今後の法文学部、さらには大学における初修外国語教育のあり方を考えるために、この経験を確実に繋いでいくことが必要である。

*この実践報告をまとめるにあたっては、令和3年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革GP）「コロナ禍における法文学部学生の「被災」記録の収集、保存—将来の災害に備えてのデータベース化と今後の課題—」経費の一部を使用した。

注

- 1) それ以前は、法文学部における第2外国語科目は、共通教育「初修外国語」として提供され、総合政策学科においては自由選択科目、人文学科では、必修選択科目であった。
- 2) 「授業の開講方針」については、愛媛大学教育・学生支援機構、教育学生支援部（2021）を参照のこと。
- 3) 法文学部の対応や取り組みについては、愛媛大学法文学部、大学院人文社会科学研究科（2021）を参照のこと。
- 4) これは、主軸となる授業形態を示している。遠隔同期型もしくは対面授業を主軸としながら、補助的にMoodleを使うケースも多かった。なお、法文学部全体の授業実施形態分布の内訳については、青木理奈ほか（2021）を参照のこと。
- 5) 「基礎外国語」がスタートした2016年度から2018年までを見ても、2016年度（(2) ①10% ②24% ④13% (3) ①29% ②53%）、2017年度（(2) ①14% ②32% ④15% (3) ①34% ②54%）、2018年度（(2) ①13% ②33% ④13% (3) ①35% ②54%）と、ほぼ同程度の結果が出ている。
- 6) 2020年度基礎外国語は、非常勤講師を含めて16人の教員が担当したが、ここでは8人の専任教員によるコメントを掲載する。
- 7) このコメントを書くにあたっては、「基礎朝鮮語」を担当された、本学非常勤講師の張栄順先生と崔昌玉先生にご協力いただいた。

参考文献

- 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉 (2021)
「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存 I —
学生を対象としたアンケート両差の単純集計結果—」『愛
媛大学法文学部論集社会科学編』第 50 号, 37-68. [https://
opac1.lib.ehime-u.ac.jp/iyokan/AA12777305_2021_50_37-
68_?key=QTML0L](https://opac1.lib.ehime-u.ac.jp/iyokan/AA12777305_2021_50_37-68_?key=QTML0L)
- 愛媛大学教育・学生支援機構, 教育学生支援部 (2021) 「「コ
ロナ禍」に対応した愛媛大学の授業運営と学生支援」『大
学教育実践ジャーナル』第 20 号, 1-10. [https://web.opar.
ehime-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2021/06/01](https://web.opar.ehime-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2021/06/01)
- 愛媛大学法文学部, 大学院人文社会科学研究科 (2021) 「コロ
ナ禍における法文学部および大学院人文社会科学研究科の
取組」『大学教育実践ジャーナル』第 20 号, 33-43. [https://
web.opar.ehime-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2021/06/05](https://web.opar.ehime-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2021/06/05)